教授インタビュー・I

中井佑 教授

工学系研究科

聞き手・文責：髙木夕貴（教育学部3年）

―報道によると、被害の差のほかに、被災地における物品などの復興支援の差があるという。平等な復興は果たして可能なのでしょうか？

皆さんの聞きたい平等性とずれるかもしれないけれど、いいですか？ 逆に僕は平等性とか公平性とかっていう、今の社会制度やふわふわした概念的につくりあげられたものは叩きつぶすべきだと思っている。

たとえば、あなた方は平等ですか？ 人それぞれ、当たり前だけど容姿に差があって、生まれた地域も違って、お母さんお父さんの仲の良さ度も違って、場合によっては両親が離婚するひともいて……ひとりひとり違いますよね。でも、大学の制度でいろんなひとを公平平等に扱わなきゃいけないというので、例えばだけど、みんな番号をつけられてさ……例えば，ほんと言うと、ひとそれぞれの個性とか、持ち味とか、興味の対象とか好きな異性のタイプとかあるわけじゃないですか。そういうものまったく関係なく先生が前に立って、顔は見てるけど名前は知らなくて、学生に向かって教科書や共通の試験で理解度を計量するわけでしょ？ これ公平ですよね、あるいは平等ですよね。でも、本当にそれでいいのかって話もあるわけでしょ。本当にそれによって、あなた方ひとりひとりが自分の良さをすくいあげてもらってるだろうかと。あるいは自分はもっとこんなことがしたいのに、何でこんなことをしないといけないんだと。単位とって卒業するためにさ。それに毎日おわれて、みんななんとなくそれに……「なんかちがうんだよな」っていう思いを抱きながら、近代以降に作り上げられたその大学っていう制度・仕組みの中で、平等のように扱われると。

【まちの個性と制度】

例えば僕は大槌という町の復興委員会のメンバーでやってきて、大槌の町の復興をどうやろうかと考えるとき、同じような被害をうけたところで陸前高田っていうところがあるけど、陸前高田はね、見るからに明るいんですよ。もう地勢からして。非常に海が開けていて、非常に美しいところで、後背地もなだらかで、ある人に言わせれば「三陸地方の湘南」だって。一方で大槌はね、なんかね、どよーんと暗いんですよ。地勢があんまり良くないのかもわからない。そういうところで、人の育ってる気質も違うし、文化も違う。歴史的に言うと、陸前高田は伊達のほうで、大槌のほうは南部なんですよ。で、伊達はともかく、南部って虐げられてきた藩だからね。近代になって、西の方の人たちが、新しい政府を開くときに、東北の方は再び反乱を起こさないように、非常に統治しにくい大きさ、あるいは、南部と伊達を一緒にしてしまうとかされているわけですよね。それは明治堺府の国土計画として。実際岩手は北海道除くと県で一番面積大きいんじゃないかな。そして、内陸の盛岡から、大槌地区に向かって、百何十キロに渡って、間に遠野ひとつしか町がない。そういう所を治めないと行けない、非常に厄介な所なんですよ。とにかくほとんどが山で。『そういうような場所は本当に平等なのか？違うんじゃないの？』っていうところから入る。実に不平等なんじゃないのってところから入らなきゃいけないんじゃないかって思うんですよ。実に不平等だからこそ、何かしてあげなきゃいけないんじゃないかってこう思うわけですよ。平等だったら、一律の制度、一律の財源、一律のシステムみたいのを出して、後は競争しなさいって、これで平等なやりかたですよね、一見。でも、さっき言ったように陸前高田と、大槌と、大船渡と、釜石と、宮古と気仙沼と多賀城と岩沼とって、全然違うわけですよね、歴史も違う、文化も違う、財力も違う。例えば女川なんかは、財源の何割か半分くらいは原発の固定資産税とか、原発をおくことによる交付金でまかなっている。そういう町は今回の脱原発の流れのなかでどうするのかと。そういう町と、原発のない町と同じように語れるのかと。あるいは今回福島原発がこんな風になって、帰れなくなった町って、実に不平等じゃないですか。僕は、基本的にはそこにたつべきではないかと。この問いの立てかた自体が違うのではないかと思います。

―今後、まちづくりのビジョンをどこに、あるいは誰に定めるべきでしょうか？

そこに住んでいる人たちにとって、それぞれ（まちへの）思いがあるわけですよね。家族をなくした人、かろうじて生き残った人、あるいは『この町にはもう住んでいられない』って思って街に対する愛情を残したまま出て行ってしまって帰るにかえれなくなった人。そういう人たちが不平等にならないような復興のやりかた、ありかたっていう方がこの平等性の意味だと思うんだけど、なかなか難しいね。僕が思うのはですね、これは自分の経験に基づく話

だけど、今まで実際のまちづくりの仕事に関わってきて、住民とワークショップをしたりして、議論して、デザインの案とか、公共空間の案とかに関して、いろんなひとがいますよね。じぶんの家の前さえ良くなればいいって思ってる人もいれば、このままじゃ街全体だめだろって思ってるひともいれば、すごくいいこと言ってるんだけどやってることがずれてるなって思うひととか。そのひとりひとりがイーブンになる、イーブンに言うことを聞いてもらえる、あるいはそれぞれの人たちの希望が等しく一定程度みたされるっていうことをめざすのは僕は間違いだと思う。それはあり得ないし、すべてのひとの言っていることすべて街のためになるわけでもないから。だから、平等性って言ったときに、その復興が何を目指したときに、ある意味での……ちょっと言い方変えようか。

【議論から共有価値を抽出する】

そのまちづくりの話に戻して、僕がいつも思っているのは、どこに参加している人、あるいはすんでいる人の「こんなのが欲しいわ」っていうのね、目先の希望を等しくかなえようとするのは絶対にしないようにしています。それは出口がないし、必ずしもそれが皆にとって等しい幸せがかえっていくわけではないので。ただ、できるだけ、多くの人が共感・共有できる価値っていうのを議論のなかで探りだしていくことがまず重要。

『誰のため』のまちづくりか、って言ったときに「この通りに住んでるこの居酒屋店主のため」って言ったらみんな反発しますよね。あるいは「このエリアに住んでるこの人たちのためにやろう」って言ったらほかのエリアに住んでる人たちは「じゃあ我々はなんなんだ」ってなりますよね。

でもたとえば、卑近な例だが、「子供たちのため」、この街をこれからつくりあげていくのは子供たちでしょう。子供たちがどれだけのびのびとして、お互い傷つけあいながらも助け合って、いろんなことを想いながら戻ってくる街にしたいねっていえば、これはかなり共有できる。特に、親がこどもを想う気持ちっていうのは、まああなた方も親になれば分かると思うけど（笑）普遍ですよね。全世界古今東西普遍な、人間の共有できる気持ちだと思う。それは今もう全世界までひろげたけど、それをぐぐっとこう、縮めてきて、例えば、日本でとか、この土地でとか、あるいはこの土地の中でのこの街とかエリアとか、その一つ一つの中で少しでも皆が共有できる価値というものを、住民と議論しながら住民の間から、そうやって引き出していく。で、それを実際の空間のデザインに落とし込んで提示する。当然それは最初かみ合わないから、また意見をもらって、直していく。このやりかたをずっと繰り返すことによってかなり共有できるものになってくるわけですね。だからそっちが大事じゃないかと思う。

住民が色々いる中、その人たちの希望が平等に満たされるように作り上げていくのではなくて、それはちょっとおいとこうと。それはかっこに入れておいて、まずは皆が共有できるものがなにかって考えませんか、ということだと思う。

【すべての喪失からの出発】

いつも日常的にやってきた公共空間のデザインの街づくりと今回が決定的に違うのは、街が全部なくなっているからね。このまちが全部なくなっちゃったというときに、じゃあ何が共有できるの？というのは、ちょっと見出せない。どういう風にそれを形にしていけばいいのかがよくわからないっていうのが、悩みですね。それがないまま進めていくと「いや、防潮堤の高さが二十メートルくらいあってもなんとしても守ってほしい」っていう声が大きければそっちになっちゃう。あるいは、やっぱり「もとはおれの土地なんだから住みたい」って声がつよければ、そのままなしくずし的に、今回ひどい被災をうけたところにもまたどんどん住むようになって、これから少子高齢化・人口減少がすすむエリアだから、かなり広いエリアに割と密度薄く、バラバラに高齢者が住むっていう非常に危険極まりない状況の街が二十年後に出来かねない。それを防ぐためには、僕がこれまでやってきた方法論ではね、共有できる価値ってものをなんとかっていうことを言っているんですけど……まあちょっと試行錯誤、模索の段階かな？ちょっとみつからない。

【小学校を軸に生活文化をプランニングする】

もちろん子どもたちのためだけではなくて大人のまちでもあるし、高齢者のまちでもあるし、さらに次の世代、さらにまたその次の世代のまちでもあるわけですよね。ただ、まちがそうやってなくなっちゃった状態の中で、まず何を突破口にして、とか何をきっかけにして皆がまちづくりに向けて、復興に向けて価値を共有しやすいかと考えたときに、やはり、子供たちの為に何が出来るかっていうところから組み立てていくのがあるんじゃないだろうと僕は思っている。

実際に大槌の場合はそれぞれの集落というか浜ごとに小学校があるんだけど、それを統合して、中学校とも合体させて、小中一環の教育をしたいという意志を実は被災前か

ら持っている。中高一貫は東京だと当たり前だけど、小中一環はまだあまりないので。ぼくはそれは非常にいいことだと思っていて、つまり復興計画の基本はやはり教育だと思うんですよね。

大槌の場合は人口が一万六千で、被災前は一番多かった昭和五十年代が二万人，津波で一六〇〇人，一割が亡くなって、二〇年後に九〇〇〇まで減る。一番多かった時が二万人だから、二万人に合わせてまちの空間的な規格ができているけど、それが九〇〇〇人しかいなくなっちゃう。その状態のまちをどうやって、まちとして生きていくか。

それを主体となって考えていくのは、おそらく今の小学生とか中学生になるわけでしょう。そういう小学生とか中学生にこそ、大槌という街の自然とか、歴史とか、生業を含めた生活文化とか、あるいは津波に関する正確な知識とか、津波を受けて、その度に死んでいって、また復興してきて、というその復興の歴史だとかをきちんと教えるということが、一番の復興計画の道だと思う。

ここまでは理念的な話で、じゃあそれを具体的にしていこうってときに、じゃあ小中一貫の学校をどこにおきましょうってなってくる。当たり前だけども、小学校・中学校一緒になったときのグランドは、当たり前だけど、今回規模の津波が来ても持っていかれないところに作らないといけない。かつ、これからできていくであろうそれぞれの住宅地、高台移転するにしても、あるいは元のところに作るにしても、人々が住んでるところからあんまりかけ離れちゃまずいわけでしょ。しかもまちが昔から歴史的に持ち維持してきた街の中心市街地ともあんまり離れたくない。

小さな街だからさっき言ったみたいに、あんまり分散させたくないわけですよ。限界集落の種をまきちらさないために。できるだけ集落をコンパクトに集約していきたいと思っていくと、学校をどこに持っていけるかっていう……これはプランニングの話だけど、かなり限定されてくるわけですよ。

そうやって、みんなが共有できる価値を一つ真ん中に、軸に据えて、とにかく何にもなくなっちゃったから何でもありっていうんじゃなくて、考えるべきことを限定していかないといけないんですよ。計画っていうのは。そうじゃないと色んな人が色んなこと言い始めてあれもこれもってなっちゃうので。

それはとりあずおいといて、まずは学校から行きましょうと。学校を作るということになると、役場だとか郵便局だとか、緊急のときに出ないといけない消防署だとか、あるいはお祭りをするときの神社だとか、そういうものも同じように考えていかないといけない。当然そこが津波のときの避難場所にもなる、じゃあその避難場所に向けて効率よく道路をもう少しこうしていきましょうとか、どんどんフィジカルプランニングに落ちて行く。

だから、僕が子供のためのまちづくりっていう言い方をしたのは、こどものためっていう、大人は関係ないっていう話ではなくて、まずはそこから始めていくことが、スムーズな復興計画につながっていくんじゃないかなってそういう意味なんです。

実務を経験しているわけではなければ当然そういう質問になるのは当たり前なんだけれど、『誰のためのまち』って言った時に、皆の要望要求が、きちんと等しくみたされるまちがいいんじゃないかなって、たぶんそういうニュアンスが含まれているんじゃないかな。

【国境を越えて】

『誰のためのまちづくり』ということについて、もっと大風呂敷を広げて言うと、世界で苦しんでいる人のためっていう気持ちもある。つまり……今回これだけ情報社会にあって、ああいう津波の映像とか苦しんでる被災者の映像とか、ぱーっと世界に散らばるわけじゃないですか。そこから日本が再びどのようなを作り出すかによって、世界でいろいろ苦しんでいる人たちに勇気を与えられるかなっていう気はするよね。衝撃だと思いますよ。僕ら日本人なのでさっき地震があっても、「ああ、またきたか」っていう感じでしょ？ 今回の津波はちょっと……度が外れた映像でしたが、洪水であればしょっちゅう来てるよね。濁流が、堤防からあふれんばかりにわーっと来て、浸水した家の人はなんか「こんなとこまで水がきた」とかって笑ってるじゃないですか。だから、日本人は、ある時自然が、自分が住んでいるenvironmentを非常に乱暴な形で関与してくるっていうことに、ある意味慣れているところがあるけれども、海外の人はたぶんそうではないよね。だからそういう人がああいう映像をみると、「なんて悲惨な目にあっているんだろう」って思う。けど、そこから日本の人たちが立ち上がって前に進むっていうのは……今この瞬間にも餓死してる子供っていっぱいいるんでしょ？ きっと。そういう国とか地域ってたくさんあるわけで、そういう人たちにメッセージを与える一つのやり方かもしれないとも思う。

【教訓：社会が抱える矛盾点】

―情報技術以外で、東日本大震災が今後どのような教訓と

なりうるでしょうか。

こういう非常に深刻な被害が起きるときというのはだいたい自然の力がその社会が抱えている矛盾点を的確についてくるっていうイメージがありますね。例えば、関東大震災、あの時はどうだったかなと考えてみると、復興計画の中核にいた太田圓三（※下注）さんは、内務省の土木部長だったんだけど、これだけたくさんの人が死んで、これだけ被害が大きくなったのは自然の力だけじゃない、人間社会が招いた部分が大きい、とはっきり言っている。関東大震災が起こったときの東京は、基本的な都市形態・社会基盤・インフラは江戸時代のまま、どんどん西洋から近代的な文物が入ってきて、生活のスタイルだけはどんどん近代化していく。でもその生活を根本から支えるインフラストラクチャーは、相変わらず江戸時代に毛が生えたようなもの。こういう矛盾点を一気につかれた、というのが太田圓三さんの説。つまり、江戸っていうのは、あくまでも封建体制における一大名の城下町であったわけで、特に日本は農業国。それに対して、その基盤そのままに、帝国主義・資本主義時代における中央集権国家の首都っていう機能を盛り込もうとしたわけですよね。その矛盾が色んなところで出たのだろうと思う。

ひとはわーっとこうきれいに着飾って、オペラとか見に行って、帰ってくるとなんかボロボロの石で押さえてるようなバラックに住んでるとおかしいんじゃないのっていうのが太田圓三さんの書いていることで、その矛盾が東京の下町がほとんど丸焼けになるっていう状況を生んだんだと思いますね。

それから阪神大震災の場合は、これは構造物被害だったんですね、基本的に。その構造物も、高度経済成長からバブルにかけて、とにかく日本がどんどん成長していくなかで大量に規格して作っていたものがドーンとやられた。

ちょうど一九九三年頃、ちょうどバブルがほとんど終わりかけてた時だよね。非常にヴァーチャルな価値……具体的に言うと土地のうえにある空間なんだけど、これにものすごい値段がついて、それを取引してどんどん膨れ上がっていって、実態がないまま、それに浮かれていた時代でした。

その時に、基本的にはものづくりをベースにおいてやってきた高度経済成長時代の構造物がメタメタにやられたっていうのはある意味象徴的でした。だから、実体をもとにした、実体に価値を置く、それをよりどころとしていた時代の終焉みたいなものであって。

今回の特に津波に関しては、そこをまた突かれたというかんじはある。つまり、さっき大槌の場合でいうと、昭和五〇年代の高度経済成長のときに（人口が）二万になった、でもいま実体は、外見は二万のまま街の広さも、あるいは道のめぐり方もどんどん海に向かって埋め立てしている。そこにじゃあ実体はあるかっていうと、中心市街地の、もう完全にシャッター街となっているところに、若い人はほとんど住んでいない。ほとんど空虚になったっていうところにどーんと津波が来て、その分だけ被害が大きくなっているという風に読めなくもないなあと思う。常に災害みたいなものは、その社会がもっている矛盾とか、文明がもっているアンバランスさを、突いてくるという意識は必要ではないかと思います。

【ポスト近代の力学】

都市計画の手法で、土地をたとえば自然に戻すとか、あるいは減らしていくっていう、そういう方向に向けられる哲学・手法が全くないってことに気がついたんですよ。全ては拡張していくための制度であり方法論であり、手法でありっていうふうにできているんだね。これはなかなかしんどいなって。

関東大震災のときは、あれは地震がくる前から後藤新平っていう人が東京市長で、もともと都市の再生計画みたいなものを練っていたんですよ。それがベースにあったので、復興計画が非常にスムーズに行った。だけど今回は誰もそんなことを全くやってないんですよ。三陸の街がもしつぶれたらどういうふうに救おうなんて何も考えられてないところに震災が来ちゃったんで、まあ右往左往しているという状況じゃないかな。

もしその少子高齢化・人口減少、二〇年後の九〇〇〇人

太田 圓三

1881–1926。明治・大正期の土木技術者・鉄道技師。詩人・木下杢太郎の実兄。1904年東京帝国大学工科大学土木工学科を卒業。逓信省鉄道作業局に入省。1910年から2年間、欧米に留学。1923年の関東大震災後、帝都復興員土木局長に抜擢され、隅田川六大橋をはじめとする「震災復興棟梁」の建設を主導。太田は、技術者でも文官でも実力のある者が政策をリードすればよい、問題の根本は専門性が未だ確立されていない土木技術のあり方にあると述べ、技術者が本来の仕事の領域を省みることなく、政治にばかり関心を向ける事態を憂慮した。太田の考えるエキスパートとは、個々の専門技術の熟練者ではなく、調査計画から施工までの総合的知識をもとに、科学的方法を用いて建設を完遂できる技術者を指す。そのようにして土木技術を専門化し、「社会が技術者の技術を必要とするように」努力しなければならない、と説いた。

という縮小に向けて、例えばね、そういう具体計画の検討を三年前から本気で着手していれば、全然違ったと思う。そういう準備が全く欠けたままやられたんだね。それが一番の教訓かな。

—中井先生が今後取り組もうとしている課題について、復興についての課題と思われることをお聞かせ下さい。

難しい……これ一番難しかったんだよね（笑）。今後の復興について課題だと思うことはむちゃむちゃたくさんあるからね、細かいレベルから。

まとめるとすれば、『まちとは何か』っていうことかな。『なぜ人間は都市っていうものを作らずにはいられないか』とか。すごく大きくくくると、そこに僕の場合は帰着している気がする。

【まち、あるいは都市とは何か】

例えばですね、復興計画を具体的に立てて行く場合に、まあ復興はもとの中心的な商店街を作りましょうというふうに計画を立てたとしますよね、でも、もともとさっき言ったようにこの商店街は津波が来る前にもう空洞化していて、実際の住民の人たちの生活っていうのはちょっと外れにあるショッピングセンターとか、隣街にあるショッピングセンターとかの方が便利なわけだよね。身の回りのもの一通り手に入るわけだし、場合によっては銭湯みたいなもの入れるし、なんて言っても車で行けて便利だし。

つまり、今回まちを復興しようと言葉ではいえるんですけど、復興しようとしているまちの実態が一体どういうものなのかっていうイメージが非常に難しい。それがいったいどういうまちなんだろう。

これまでの様に個人商店主がばあっと軒を連ねて、八百屋とか何とか屋とか、軒を連ねて人々がそこでにぎやかに買い物をするっていうそういうまちをイメージするのがほんとにリアルなのかと、でも逆に、そういうのがなくて、人がちらほら住んでいるだけで、買い物は郊外のショッピングセンターに車で行ってやってると、それってまちって言えるのかねと。

じゃあまちってなんだろうと、そういうことを考える。たぶん、時代を通して変わらないものと、どんどん着替えていくことができるもの、つまり変わっていけるものっていうのは色々あると思うんですよ。そこを見極めるっていうのが課題かな。

まちの本質っていうのはなんなんだろうなというのが今のテーマですかね。あんまり今まで考えたことなかったんですよ、正面切ってはね。

それで、東大の都市工の久保田先生とか、川添先生とかとチームをつくって、東大の復興支援プロジェクトっていうのを立ち上げて、最初にやったのが屋台をつくるっていうの。街のがれきの真ん中に赤ちょうちんで屋台をつくってやったわけだけど、たぶんネットのニュースかなんかでやってるとおもうけど、居酒屋の屋台じゃなきゃ絶対いけなかったかっていうと、そうでもないかなって気もするんだけど、直観的に、屋台で酒飲める場所がいいっていう。

【都市の普遍性】

後から考えてみると、イスラム圏の都市は行ったことないから分からないんだけど、古今東西都市からなくなったことがないものって、居酒屋でしょ。ただ抽象的に都市って何かっていう問いを、ダイレクトでやるっていうよりは、「たしかに都市って酒飲むとこだよな」とかね、酒を飲むっていうことは、男だけで酒飲んでてもつまらないから、

酒を飲ましてくれる女の子がいる店みたいのが必ずあって、水商売でやってる女性たちが身だしなみを整える美容院なんてものも、絶対になくならないものだと思うんですよ。そうやって考えていくと、都市とは何かっていうのの、その本質的なところにとどかないまでも、あんまり離れてないところに辿り着けるんじゃないかっていう気がしています。学校っていうのも、たぶん、都市にあるべきものなんじゃないかと思うんだ。一度調べてみないといけないんだけど、例えば日本は、特に江戸時代から世界的にみても非常に教育大国で、多くの藩が藩校みたいなものとか、寺子屋みたいなものを持っていて、とにかく一生懸命教育をしていたわけですよね。世界的に言うと異常な識字率を誇っていたわけですけど、そういう藩校ってどこにあったんだろうなっていうのは一回調べてみようと思って。

それから、近代ルネサンス以降の西洋での大学も、最初の大学はまちと一体だから。だから、学校とまちっていうのは、かなり都市というものを考える際に重要な一つの視点なんだろうなと思っています。

【地域的不均衡の上の都市文明】

だから、諸君にもぜひ一度考えてほしいね。『まちって何のためにあるの？』。

この近代という膨張文明の文脈のなかにおいては、極めて歪んだ地域的な不均衡の上に成り立つ文明生活というものは、歴史的必然かなと言い聞かせられるけど、もうそれは転換したっていうことにどれだけの人が気づいている

かっていうことだと思います。もう膨張文明ではない、むしろいかに集約していくか。そのときに、田舎に都会の生活を補償するための非常に大きなリスクを負わせるというこのやり方をあと五十年とか百年とかっていうのはしんどいよなって思うわけ。

僕が一九五八年生まれだから、高度成長の割とピークに来たころに生まれて、学生時代はバブルを……僕は謳歌はしなかったけど（笑）、バブル時代に学生を過ごして、やってきたわけだから、僕の世代はまあ、しゃあねえなあと思うわけですよ。ああいう原発の事故みたいなもので放射線にある程度脅えながらっていうのはまあ、自業自得だと。ただ、次の世代にそれを残すわけにいかないからね。本格的にそこらへんの近代文明がもたらした恩恵の矛盾の部分だよね、矛盾の部分っていうのは洗い出して考えていくことが役に立つと。おっきな話になっちゃったけど。まあいいよね、大学だから（笑）。現実の大槌の復興計画でこんなこと言わないよ（笑）。

【復興の青写真】

—復興を視覚的に実感して糧とするためにも、できるだけ早くまちが復興してほしいなという気持ちはやっぱりあります。

いわゆる僕らがまちと言っているような、当たり前に思っているようなまちを早くつくらなきゃって思ってもこれは現実的に無理だから、これは時間がかかりますよね。でもね、その屋台をやってみて思ったんだけど、その屋台っていうのは地元の製材所の人に津波を被った木材を無料でもらってね、もちろん津波で店とかわーっと流された居酒屋のひとと出逢ったのがきっかけなんだけど、『屋台作りますか』ってなって、瓦礫のこう……夜真っ暗なわけよ、そこに赤ちょうちんがポッとつくわけね、これなかなかこう……いいわけですよ。僕はずっと風景を研究してるけど、あの風景っていうのはなかなか論理的に説明しがたい良さがあってね、そこに三々五々ひとが集まってくる。避難所から毎日来てるっておっさんもいるし、車で酒飲めないけどって言って一時間くらいお茶と食いもんだけでまた帰っていくっていう人もいるし、『明日から仮設住宅に入るからまあお互い一杯飲むか』っていう何人組かがきたりとかね。そのときに僕が思ったのは『ああ、この屋台のこの空間の中にまちがあるな』ってことだった。

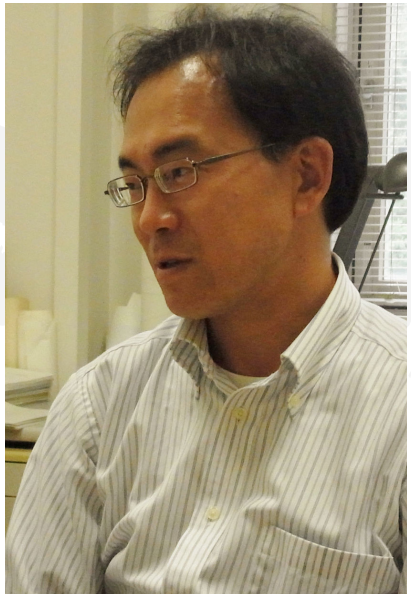
だから、早くまちをつくらないとっていう思いは同じなんだけど、早く復興のまちのあり方を示すって言ったときに、僕らが思い描いているこういう街を見せるっていうの

も大事なんだけれど、そうではなくて、人々が奥底のところで都市に求めているものとか、都市から受け取っているものっていうのを凝縮した形で、それこそ屋台みたいなバラックでも構わないので、場所をつくれれば、もしくはそういう時間を提供できれば、それは少なくとも繋ぎにはなっていくし、むしろね、そういうところでの人間同士の交流っていうのがこれはね、なかなかいいもんですよ。

—むしろそういうものがまちかもしれない、と。

じゃないかなって思う。だから何らかの意味での人と人とのつながりっていうのが、まちのこの本質なんだろうと思うんだけど、それだけじゃないんじゃないかなって思う。つまり、人間のつながりって家族のつながりとか恋人同士のつながりとかいろいろあるわけですよね。まちが与えてくれる一番大事なつながり方って何かなっていう……そういう問いに置き換えられるかな。

—今日は長い間お話を聞かせていただき、ありがとうございました。



中井祐（なかい　ゆう）

一九六八年生まれ。東京大学大学院工学系研究科教授。景観論、土木構造物・公共空間のデザイン、近代土木デザイン史を研究。東京大学が推進する大槌町の復興プロジェクトに関わる。